

# ピアノの弾き歌いにおける指導の実践研究

市 橋 佳 明\*

## The Practical Study of Teaching Methods for Playing the Piano while Singing Songs

Yoshiaki ICHIHASHI

ピアノの「弾き歌い」は、保育現場では必要不可欠である。しかし、多くの学生が「保育者にとって弾き歌いの技術は必要である。」ことを認識しているにもかかわらず、「弾き歌い」をすることが非常に難しいと感じ、保育者として、子どもたちの前で自信を持って「弾き歌い」できるというような状況ではない。今回の実践研究では「弾き歌い」をするために、「読譜力」を高める指導、「ピアノ実技の力」を高める指導、「歌唱力」を高める指導について、学生の実態を踏まえながら、それぞれの力を高めるための明確な観点をもって、「弾き歌い」を具体的に指導していくことの大切さを明らかにした。さらに、読譜力、ピアノ実技の力、歌唱力の3つの力について、具体的な弾き歌い指導のステップを作成し、保育者としてつけない力を、バランスよく段階的に指導していく方法を明らかにした。

キーワード：読譜力、ピアノ実技の力、歌唱力、弾き歌い指導のステップ、指導方法

### 1 はじめに

幼稚園や保育所での活動を思い浮かべた時、子どもたちが、みんなと一緒に歌を歌ったり、踊ったり、リズム楽器を弾いたりしながら、音楽を楽しんでいる情景が目浮かぶ。これは、子どもたちが、自己表現する手段として自然な姿であり、保育者は、音楽活動によって子どもたちの豊かな感性が養われ、磨かれるものと自覚して音楽指導に当たりたいと思う。

幼稚園教育要領、保育所保育指針においても領域「表現」で、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」と記述されている。そこからは、歌を歌ったり、踊ったり、楽器を弾いたりして音楽に親しんだり楽しんだりすることも大

切であるが、さらにそれらの音楽活動を通して、子どもたちが素直に自己表現できるように指導の配慮をしていかなければならないことが分かる。

子どもたち一人一人の自己表現は、様々な様相で行われることが多く、保育者はそのような表現を受容し、一人一人が表現しようとしている意欲を大切にしたい指導をしていかなければならない。そのためには、保育者は子どもたち一人一人の表現をよく見つけ、その様相にあった指導をしたり配慮をしたりして、子どもたちが自己表現活動を楽しむことができるように工夫していきたい。

しかしながら、本学教育学部子ども教育学科の学生の実態を見てみると、現実的な「弾き歌い」の課題として次のようなことがある。楽譜を読むことができない。ピアノがすらすらと弾けない。楽譜を見ながらであればピアノがなんとか弾くことができる

---

\*教育学部非常勤講師

が、子どもたちが眼前にいることを想定して暗譜で弾くことは難しい。教室に響き渡るくらいの声で歌うことが難しい。歌を歌うことに抵抗感がある。ピアノだけ、歌だけであれば何とかできるが、ピアノと歌を合わせて「弾き歌い」しようとするとうまく合わせることができない。ピアノを弾くことに集中してしまって歌を歌おうとすると、ピアノもうまく弾けなくなる。

このような学生の実態は、ピアノ演奏や弾き歌いについて、本学に入学するまで初心者である学生も多いという実態もあり、やむをえない姿ではある。とは言うものの、保育者をめざす学生たちにとっては、「弾き歌い」ができるということは必須のことであり、「弾き歌いがうまくできるようになりたい。」という学生の意欲や決意でもある。

このような課題については、読譜力、ピアノ技術、歌唱力、弾き歌いについての学生側の課題のみが問題視される傾向にあるが、指導者側の指導方法についても考えていく必要があると思う。

そのため、筆者は、保育者をめざす学生たちから実態調査のアンケートをとり、実態把握・考察をして、「弾き歌い」の効果的な指導方法を検証し、問題点・改善点・効果的な指導方法を考え実践研究した。

## 2 方 法

保育者をめざす学生に対して、「弾き歌い」の効果的な指導方法を考える基盤として、下記のような実態調査をした。

### (1) 実態調査のためのアンケート対象者

本学教育学部子ども教育学科2年生のうち、「音楽表現技術A・B」(弾き歌い)の授業を受講している61名を調査の対象者とした。

### (2) 調査期間

平成28年9月～10月に実施した。

### (3) 調査方法

「音楽表現技術A・B」(弾き歌い)を担当している他の先生方にもご協力いただき、学生一人一人に選択式のアンケート(自由記述あり、無記名)を配布し回収した。(回答者51名、回収率83.6%)

### (4) 調査内容

・大学入学時までのピアノの学習経験

- ・身近にピアノ、キーボードが学習できる環境
- ・弾き歌いの1週間の練習回数
- ・弾き歌いの1回当たりの練習時間
- ・弾き歌いの自主的な練習ができにくい理由
- ・弾き歌いに対する意識
- ・弾き歌いがうまくできるための手だて
- ・悩んだり困ったりしていること(自由記述)

## 3 結果と考察

### (1) 大学入学時までのピアノの学習経験

「大学入学時までに、ピアノの学習経験はありましたか。」

表1 大学入学時までのピアノの学習経験

①5年以上	22人(43.1%)
②3年以上5年未満	5人(9.8%)
③3年未満	11人(21.6%)
④全くなし	13人(25.5%)

大学入学時までのピアノの学習経験について、全くと回答した学生が約4分の1、3年未満の学生と合わせると約半数の学生がほとんどピアノの学習経験がないということが分かった。また、5年以上、3年以上5年未満と回答した学生を合わせると、約半数の学生が何らかの形である程度ピアノの学習経験をしてきたことが分かる。

さらに、学生の実態と照らし合わせたとき、ピアノの学習経験が5年以上と回答した学生が43.1%もいるという現状に大変驚いたが、小中学生の時にピアノを学習していたが、やめてしまったという学生もかなりいることが分かった。今回のアンケートでは、その詳細については調査しなかったため、今後の実態調査の課題としたい。

今回、大学入学時までのピアノ学習経験のアンケート調査をしてみて、一見、ピアノの学習経験がある学生が多いように感じられるが、実はピアノを本格的に学習した経験のある学生、あるいは毎日のようにピアノを学習したという学生は少なく、中には幼少時代にはピアノを習っていたが、やめてしまったという学生もかなりいるという実態が分かった。

- (2) 身近にピアノ、キーボードが学習できる環境  
「ピアノ、キーボードなどの身近な学習環境について、回答してください。」

表2 身近にピアノ、キーボードが学習できる環境

①身近にピアノがある	30人 (58.9%)
②身近にキーボードがある	17人 (33.3%)
③身近にはない	4人 (7.8%)

今回の実態調査で、身近にピアノもしくはキーボードがあると回答した学生が、92.2%にものほり、身近にはないと回答した学生の数を大きく上回ることが分かった。しかも、ピアノもしくはキーボードが身近にはないと回答した学生が、4名しかないことに少々驚いた。

大学でのピアノの弾き歌い授業の他にも、ピアノを弾くことができる学習環境がある学生が大変多いことが分かった。

- (3) 弾き歌いの1週間の練習回数

「弾き歌いの練習は、1週間に何回しますか」  
※弾き歌いの1回の練習時間は15分以上

表3 弾き歌いの1週間の練習回数

①週4回以上	1人 (2.0%)
②週2回以上4回未満	12人 (23.5%)
③週1回	17人 (33.3%)
④授業のみ	21人 (41.2%)

弾き歌いに関して、1週間に何回練習していますかという問いに対して、授業のみと回答している学生が41.2%であり、弾き歌いの授業以外全く練習していないという学生が非常に多いということが分かった。

全く練習しない学生と、1週間に1回だけ練習すると回答した学生を合わせると、74.5%の学生、すなわち4人に3人は弾き歌いの練習をほとんどしていないことになる。反対に、弾き歌いの練習を1週間に4回以上している学生は、たった1人である。

前述した身近にピアノあるいはキーボードがあり、練習できる環境にある学生が92.2%もいることから考えると大変残念な結果である。

身近にピアノあるいはキーボードがあるということは、弾き歌いを練習する上で非常に恵まれた学習環境にあり、学生が意図的、自主的に弾き歌いの練習に取り組もうとする意識があれば、弾き歌いに関してかなり上達することができるようになると思う。

しかし、このことについては、学生の弾き歌いに対する意識の問題だけではなく、自主的な練習ができにくい学生生活の諸問題も絡んでいる。学生が自主的に練習できにくい理由については後述する。

- (4) 弾き歌いの1回当たりの練習時間

「弾き歌いの練習は、1回当たり平均して何分くらいしますか。」

表4 弾き歌いの1回当たりの練習時間

①1時間以上	8人 (15.7%)
②30分以上1時間未満	13人 (25.5%)
③15分以上30分未満	19人 (37.2%)
④15分未満	11人 (21.6%)

弾き歌いの1回当たりの練習時間について、15分未満、15分以上30分未満を合わせると、58.8%であった。半数以上の学生が、1回当たりの練習時間が30分未満であることが分かった。

1楽曲の弾き歌いができるようにするためには、学生一人一人のピアノ実技や歌唱力などの実態にもよるが、少なくとも楽譜を読む、ピアノで右手が弾ける、ピアノで左手が弾ける、右手と左手を合わせて両手でピアノが弾ける、歌詞を覚える、ピアノを弾きながら歌を歌うことができる、自分の目の前に子どもたちがいることを想定しながら弾き歌いができる。などのステップが必要になると思われる。

したがって弾き歌いができるようになるためには、1回に30分以上の練習時間を確保するなど、ある程度まとまった練習時間の確保が必要であるが、現状は練習時間がなかなか確保しにくい状況にあると考えられる。

- (5) 弾き歌いの自主的な練習ができにくい理由  
「弾き歌いの自主的な練習ができにくい理由は何ですか。」 ※複数回答可

表5 弾き歌いの自主的な練習ができにくい理由

①身近にピアノがない	4人
②楽譜が読めない	4人
③ピアノを弾くのが嫌いだ	6人
④アルバイトに忙しい	25人
⑤その他	6人

前述したように、弾き歌いの1週間の練習回数について、ほとんど練習していない学生が74.5%、弾き歌いの1回の練習時間について30分未満の学生が58.8%にも上がることが分かった。

多くの学生が、弾き歌いの自主的な練習ができにくい状況にあり、その理由を聞いたところ上記のような結果がでた。

まず自主的な練習ができにくいという理由で1番多かったのが、アルバイトに忙しいため練習できないという理由であった。この理由を回答した学生は全体の55.6%であり、半数以上の学生が大学の授業が終わってからアルバイトをしたり、土曜日や日曜日にもアルバイトをしたりして、弾き歌いの練習時間を見い出せないでいることが分かった。

その他と回答した学生の記述を見ると、部活動に忙しい、歌を歌うことが嫌い、ピアノを弾く習慣がないので練習を忘れがちになる、ピアノの弾き歌いをするのにやる気が出ないという理由があった。

このような理由のほか、楽譜が読めない、ピアノを弾くことが嫌いだという学生も若干名いる現状を踏まえて、弾き歌いの授業では学生が少しでも音楽に親しみ、自ら音楽学習に取り組んでいくことができるよう配慮して指導に当たりたい。

- (6) 弾き歌いに対する意識

「ピアノの弾き歌いに対して、どのように思っていますか。」 ※複数回答可

表6 弾き歌いに対する意識

①保育者にとって弾き歌いの技術は必要である	39人
②弾き歌いが得意である	2人
③練習すれば弾けるようになって楽しい	15人
④できるようになるまでに時間がかかりすぎて嫌だ	5人
⑤楽譜が読めずピアノが苦手である	4人
⑥歌を歌うことが苦手である	6人
⑦ピアノと歌を合わせようとするのが難しい	11人
⑧保育者にとって弾き歌いができなくても問題ない	0人

保育者として弾き歌いの技術は必要であると回答している学生が76.5%、弾き歌いができなくても問題ないと回答している学生は0%であり、多くの学生は保育者をめざす上で、弾き歌いができることは必要であると思っている。さらに、弾き歌いの練習をすれば弾くことができるようになって楽しい、と回答している学生も29.4%と約3分の1に上り、学生の弾き歌いに対する意識としてはまずまずの結果となった。

しかしながら、できるようになるまでに時間がかかりすぎて嫌だ、楽譜が読めずピアノが苦手である、歌を歌うことが苦手である、ピアノと歌を合わせようとするのが難しいというような意識の学生も26人おり、このような苦手意識を解消していくことができるように指導方法の改善に努めていかなければならない。

- (7) 弾き歌いがうまくなるための手だて

「弾き歌いがうまくなるためには、どうしたらよいと思いますか。」 ※複数回答可

表7 弾き歌いがうまくなるための手だて

①ピアノの練習回数・練習時間を増やす	42人
②歌の練習回数・練習時間を増やす	17人
③弾き歌いを段階的に練習する必要がある	31人
④身近にピアノやキーボードが必要である	2人
⑤大学の授業以外に個人レッスンを受ける	2人



ピアノの弾き歌いがうまくできるようにするための手だてとして1番多かった回答が、ピアノの練習回数や練習時間を増やすで、82.4%とほとんどの学生が回答してきた。また、歌の練習回数や練習時間を増やすとした学生も3分の1おり、練習回数や練習時間を増やさなければ弾き歌いはうまくなならないことを承知していることが分かった。

学生の意識としては、練習回数や練習時間を増やしたり確保したりして弾き歌いの練習をしていかなければならないことは分かっているが、前述したようにアルバイトなどに忙しいという理由もあって、自分が思うようには自主的な練習ができにくいといったもどかしさもあるように感じる。

さらに、弾き歌いを自主的に練習しようとしても、どのように練習してよいのかよく分からないといった声も聞かれ、段階的に練習しなくてはならないと回答している学生が、60.8%いることも分かった。この課題については教師側の指導方法の改善とも大きく関わってくると思われる。

(8)「弾き歌い」に関して、悩んだり困ったりしていることがあったら、自由に記述してください。

- ・始めて学習する曲、今までに聞いたことがない曲に出会うと、ピアノも歌も覚えることに苦労する。
- ・歌の歌い方、声の出し方がよくわからないので、もっと練習したい。
- ・ピアノを弾くことに集中しすぎてしまって歌声がどうしても小さくなってしまう。また、歌を大きく歌おうとすると、ピアノがうまく弾けなかったり間違えたりしてしまう。
- ・ピアノを弾くだけとか、歌を歌うだけだったらよいが、ピアノと歌を合わせて弾き歌いしようとするとうまくできなくて難しい。
- ・大学に入学してから始めてピアノを弾く学生にとって、弾き歌いは大切なことは分かるがとても難しい。
- ・ピアノで右手だけ、左手だけ弾くことができるようになって、右手と左手の両方を合わせて伴奏しようとする、わけがわからなくなってしまう伴奏することができない。

ピアノの弾き歌いができるようになることは必要なことであるということは分かっているが、ピアノを弾くことと、歌を歌うことを同時にしなければならないところに、学生の何人かが難しさを感じている。前述したように、弾き歌いが段階的に学習していくことができるように指導方法を明確にしていきたい。

#### 4 「弾き歌い」指導の具体的実践

弾き歌いができるようにすることは大変難しいことではあるが、保育者をめざす学生が、楽しくできる限り容易に学習していくことができ、弾き歌いの力を高めていくことができるように、次の5点から実践研究を深めた。

- ・本学の「弾き歌い」の授業について
- ・「読譜力」を高める指導について
- ・「ピアノ実技の力」を高める指導について
- ・「歌唱力」を高める指導について
- ・「弾き歌い」指導のステップについて

##### (1) 本学の「弾き歌い」の授業について

###### ①弾き歌いの授業と音楽環境

本学では、「弾き歌い」授業を、音楽表現技術A(2年前期)・音楽表現技術B(2年後期)として実施している。ピアノ実技に関する授業としては、1年の学生も音楽A・音楽Bの授業を履修しているが、弾き歌いの授業は2年が中心となる。

弾き歌いの授業は、1グループ4～7人を1グループとして、5～6グループに分かれ、それぞれ担当教師が1週間に1回90分のピアノ実技、ピアノ弾き歌いの授業をしている。レッスン室は7教室あり、各レッスン室にはそれぞれアップライトピアノ1台とキーボード7台がある。学生一人一人がキーボードで練習しつつ、順番にアップライトピアノで担当教師が弾き歌いの指導をしている。1時間の授業が90分なので学生一人当たりの指導時間は、15分程度である。

###### ②ピアノ、弾き歌いに関するカリキュラム

カリキュラムの内容は、音楽A(1年前期)・音楽B(1年後期)がバイエル教則本を中心とし、学生の実態に応じてブルグミュラー、ソナチネ、ソナ

タアルバムを履修している。ピアノ弾き歌いの授業は基本的に2年からで、音楽表現技術A（2年前期）・音楽表現技術B（2年後期）として実施し、教材として「幼児の歌12ヶ月」や「幼児の歌110曲集」、教師の選択した教材を履修している。

カリキュラムの年間授業実施回数は、音楽A（1年前期）、音楽B（1年後期）、音楽表現技術A（2年前期）、音楽表現技術B（2年後期）それぞれ16回である。

2年の学生は、1年間で20曲以上の弾き歌いのレパートリーができることを目標としている。教師は、前述した曲集などからいくつかの教材を選択し、その難易度や保育教育現場の状況などに合わせて、「導入の教材」「ステップ1の教材」「ステップ2の教材」「ステップ3の教材（自己選択教材）」を表に示し、学生が具体的な目標を持って履修していくことができるように配慮している。

### ③弾き歌いの評価

評価は、日頃の授業態度とピアノ弾き歌いの実技試験によって行っている。弾き歌いの実技試験は、音楽表現技術A（2年前期）においては、学生が3曲自己申告した曲の中から当日1曲を弾き歌いし、音楽表現技術B（2年後期）においては、学生が5曲自己申告した曲の中から当日2曲を弾き歌いして、担当している5～6名の教師が、それぞれ100点満点（5点刻み）で評価している。

また、採点用紙には点数だけではなく、学生の弾き歌いに関する所見も書き込んでいる。評価の視点は、ピアノ実技、歌唱力、弾き歌いの様子、目の前に子どもたちがいるような状況をイメージして弾き歌いでできているかどうかなどである。

## （2）「読譜力」を高める指導

### ①曲との出会い

学生には、始めて曲に出会ったときのイメージを大事にしてほしいと思っている。始めて曲と出会ったとき、学生のほとんどが、楽譜を見て右手だけでメロディーを弾くことから始める。このとき、楽譜から読み取ることができる音楽的な情報を、瞬時にあるいは丁寧に読み取ってピアノを弾き始める学生と、そうではなくて、楽譜に書かれているいくつかの音楽情報を、ほとんど読み取ることをしないで弾

き始める学生がいる。

当然後者の場合は、曲のイメージをほとんど掴めなかったり、間違えてメロディーを弾いたりしてしまうことが多くなる。したがって、新しい曲と出会ったときには、まず楽譜を丁寧に読み取るということが大切になってくる。最近では「You Tube」から曲のイメージを把握する学生も多いが、それはイメージを把握する補助的な手段に止め、楽譜を読み取る力を高めることによって弾き歌いにつなげてほしいと筆者は願って指導している。この丁寧に楽譜を読み取る学習こそが、将来保育者になったときに生きて働く力になると思う。

### ②楽譜から読み取る音楽情報

楽譜には様々な音楽情報が書き込まれている。そこには、作曲者、作詞者、編曲者の音楽的な意図が書き込まれており、学生はそこに書かれているいくつかの音楽情報を、まずは忠実に読み取って弾き歌いとして表現することが大切になってくる。

それでは楽譜にはどのような音楽情報が書き込まれているのであろうか。楽譜から読み取ることができるいくつかの音楽情報を下記に示してみる。

#### （ア）高音部譜表と低音部譜表

弾き歌いの楽譜は、おおまかに高音部譜表（ト音記号）、低音部譜表（ヘ音記号）、歌詞の部分から成り立っている。おおむねト音記号の部分は右手でピアノを弾き、ヘ音記号の部分は左手でピアノを弾くことになる。このとき、ト音記号の下第1線およびヘ音記号の上第1線が、ピアノの「中央のド」（一点ハ音）になることを丁寧に指導しなければならない。

特に学生にとってヘ音記号の楽譜を読み取るのは今までにあまり経験がなく大変難しいようである。ヘ音記号の楽譜において、上第1線、第2間がドになるということが、楽譜を見てすぐに理解しピアノ実技に生かすことができるよう経験を積みませたい。

#### （イ）調号

ト音記号やヘ音記号のあとに、シャープやフラットの調号が付いている楽譜がある。シャープやフラットの数によって、ハ長調、ト長調、ヘ長調・・・などと呼ばれ、シャープが1つのときは「ファ」に

つき、シャープが2つのときは「ファ」と「ド」につく。またフラットが1つのときは「シ」につき、フラットが2つのときは「シ」と「ミ」につくと決められている。そして、シャープが付いている音は半音上げ、フラットが付いている音は半音下げてピアノを弾かなければならない。この調号についても確実に読み取って、ピアノ実技に生かしていく必要がある。

#### (ウ) 拍子記号

調号のあとに楽譜に書かれていることが拍子記号である。たとえば「4分の4」という拍子記号は、「1小節の中に4分音符が4つ分ある」という拍子であることを理解して、「1・2・3・4」という拍を感じながらピアノ実技をする必要がある。

#### (エ) 音符と休符、リズム

音符も休符も様々あるが、基本的な音符や休符として、4分音符、8分音符、2分音符、4分休符、8分休符などについては理解しておきたい。また、これらの音符や休符の組み合わせによって、いくつかのリズムも構成されるため、身体で拍を感じながらリズム感を養っていくことも非常に大切なことになってくる。

#### (オ) そのほかの様々な音楽情報

楽譜には前述した様々な音楽情報のほかに、次のような記号あるいは情報も記されている。強弱、速度、奏法、曲想、演奏の順序を示したものなどである。

強弱記号は、フォルテ（強く）、ピアノ（弱く）やクレシェンド（だんだん強く）、デクレシェンド（だんだん弱く）などの記号がある。また、速度記号には1分間に4分音符がいくつ打つ速さということを記号で示したり、アダージョ（遅く）、アンダンテ（ゆっくり歩くような速さで）、アレグロ（速く）のように速さを言葉で示したりするものもある。さらに、スタッカート（その音を短く着る）、アクセント（その音を特に強く）、フェルマータ（その音符や休符をほどよく伸ばす）というような奏法に関する記号や、カンタービレ（歌うように）、ドルチェ（あまくやわらかに）、レガート（なめらかに）、マエストーソ（荘厳に）など曲想に関するものもある。

実際に弾き歌いするときには、学生は楽譜に示されているこれらのたくさんの音楽情報を、読み取って演奏することが大切である。しかしながら、学生の約半数は、ピアノ経験が3年未満の初心者である。そこで、学生の読譜力を高めながら弾き歌いができるようにするために、指導者は上記のような様々な音楽情報について、学生一人一人の実態に応じて日々の授業に臨み指導することが大切になってくる。

#### (3) 「ピアノ実技の力」を高める指導

本学は、学生の約半数がピアノ初心者である。初心者にとって、ピアノを弾くということは非常に困難なことである。その学生たちに、まずはピアノを弾く基本的な動作を指導する必要がある。

##### ① ピアノを弾くための姿勢

ピアノを弾くためには、中央のド（一点ハ音）の位置に、自分の身体を中心をおいて座ることが大切である。また、ピアノが演奏しやすいように椅子の高さを調節する。右手と左手が自由に動かしやすいように、椅子にはあまり深く腰掛けず浅く腰掛ける。そして、背筋を伸ばして正しい姿勢で演奏したい。このとき、椅子に深く腰掛けたり、前かがみになったりしがちなので留意して指導に当たっている。

##### ② 楽譜とピアノの鍵盤

ピアノの鍵盤は88鍵あるが、楽譜のト音記号の下第1線、およびヘ音記号の上第1線が、ピアノの「中央のド」（一点ハ音）になっていることを丁寧に指導したい。

また、ピアノの鍵盤は12鍵が1つのまとまりになっていることを学生に理解させるとともに、常にピアノの「中央のド」（一点ハ音）を意識させて演奏させたい。時折、1オクターブ間違えて演奏し始める学生がいるが、「中央のド」（一点ハ音）の位置を確認しないで、ピアノの椅子に座ったとたんに弾き始める学生に多い。椅子に座ったら落ち着いて「中央のド」（一点ハ音）の位置を確認し、正しい姿勢で演奏を始めさせたい。

##### ③ 読譜とピアノ演奏

楽譜を読み取りながらピアノを弾くということは非常に難しいことである。特に、ピアノの初心者



としてはなおさらである。そうしたことから、楽譜にカタカナで階名（ドレミ）を書き込んでいる学生もいる。本来からすれば、階名を楽譜に書き込むことをしないで、楽譜を見ながらピアノ演奏できることがよいと思われるが、筆者は学生一人一人の実態に応じて認めたり、段階的に階名を書き込むことをやめさせたりして指導している。中には階名を友だちに書いてもらっている学生もいたので、少なくとも楽譜を自分の力で読み取り、階名を自分で書き込むように指導した。その結果、初めは演奏しにくい部分や、演奏することに不安な部分について、階名を書き込んでいた学生たちも次第に階名を書き込まなくても演奏できるようになっていった。

#### ④手の形と運指

ピアノを弾くとき学生に多い手の形が、指を真っ直ぐに伸ばしたまま、非常に力を入れているという姿である。指を真っ直ぐにしてピアノを弾くと、ピアノ本来のよい音が出にくいばかりか、隣の音も一緒に弾いてしまい、美しい音色の演奏になりにくいということがある。

ピアノを弾くときの指は、関節を曲げて丸みを持たせ、1本1本の指が自由に動かしやすいように、力をガチガチに入れないで演奏したい。

また、右手も左手も「指番号」が決められていて、楽譜には演奏がしやすいように、その指番号が示されていることもあるので、その指番号の指示に従って演奏したい。時折、楽譜に指番号が示されているにも関わらず、その指番号に従わず演奏するために、大変弾きにくい演奏になったり、音はずして演奏したりする姿も見られるので、留意して指導に当たっている。

#### ⑤簡易伴奏

弾き歌いの伴奏譜には、本来作曲者や編曲者の大きな意図がある。しかし、学生がその楽譜通り演奏しようとする、いくつかの点でつまづいたり、演奏しにくかったりする。それは大まかに、大きく音が跳んでいる跳躍音程であったり、左手の小指の音を押さえたまま残りの指を動かして演奏しなくてはならなかったり、和音伴奏から分散和音の伴奏に時々伴奏形態が変わったりするような場合である。また、親指と小指がいくら頑張っても、1オ

クターブに届きにくく演奏していると他の音まで一緒に押さえてしまい、演奏の音が濁ってしまうことも多い。

このような場合、作曲者や編曲者の意図からは外れてしまうことかもしれないが、筆者は和音の1部分を変えたり、1部分の音を省略したり、ピアノ伴奏の1部分を変えたりして、ピアノ伴奏をさせている。

このことによって、演奏しにくかったり、間違えてしまったり、その部分になると不安になって速度が変わったりリズムが不安定になったりしていたことが、安定したよい音でのピアノ演奏につながっている例も多い。

ピアノの弾き語りは、楽譜に書かれていることを忠実に弾くことも大事であると思うが、もっと大事なことは、保育者として子どもたちの前で、子どもたちの様子を見たり、あるいは子どもたちに指示を出したりしながら、楽しく堂々と弾き歌いができるということであると思う。したがって、保育者として、という視点を大事にして指導に当たっている。

#### (4)「歌唱力」を高める指導

##### ①歌詞とイメージの把握

子どもたちは、身体をいっぱい使って歌を歌うことが大好きである。中には、興奮して大きな怒鳴り声で歌っている子もいる。これは、歌詞の内容や情景をイメージすることなく、友だちとの声の出し合い、声の張り合いだけに心がいていて、大きな怒鳴り声を出してしまうのだと考えられる。このような怒鳴り声で歌っている子どもは、たいがい1曲を歌うと身体も声も非常に疲れてしまい、座り込んでしまったり姿勢が崩れてしまったりして、あとの音楽表現活動がうまくできなくなってしまう場合が多い。

保育者は、曲のもっている特徴や魅力を感じたり理解したりして、その魅力を子どもたちに伝えながら指導したい。そのためには、保育者がその曲を好きになり魅力を感じて指導できるような教材研究が必要になってくる。

保育者が、曲のもっている特徴や魅力、歌詞の内容を、うまく子どもたちに伝え、子どもたちの表現を認めながら音楽表現活動をすれば、きっと興奮して大きな声で、怒鳴りながら歌う子どもは少なくな



ると考える。しかも、その曲の特徴や、歌詞の内容を理解しながら歌うようになると思う。子どもたちが、拍の流れやリズムにのって、表情豊かに歌うことができるような指導をめざしたい。

### ②歌を歌うことの抵抗感

歌の歌い方、声の出し方がよくわからない、歌を歌うことがとても苦手であるという学生がいる。実際に弾き歌いの授業をしていて、ピアノ伴奏はできるが歌を歌いながら演奏するとなるとできなくなってしまったり、ほとんど聞こえないような小さな声でしか歌えなかったりする学生もいる。他の学生が聞いているところで歌を歌うということに羞恥心があったり、歌を歌うという経験が浅かったり、歌を歌うことにコンプレックスをもっていたりする場合が多い。

しかし、保育者は子どもたちの前で、大きな声で表情豊かに歌わなければならない。そのため、歌を歌うことに抵抗がなくなるように、繰り返しレッスンすることが必要である。最初は、小さな声で歌っていても認めたり励ましたりしていくうちに、次第に大きな声で歌うことができるようになってくる。また、ときには、同じ練習室でレッスンしている学生にも、弾き歌いしている学生と一緒に歌ってもらうこともある。こうすることによって、徐々に歌うことに抵抗感が少なくなったり、自信がついてきたりする場合が多い。

### ③基本的な歌い方

子どもたちは、先生の歌い方や仕草を本当によく見ていて、模倣することが多い。そのため、子どもたちの前に立って指導する保育士は、そのことをよく理解して、自分自身の確かな歌唱力をつけ高めていくことが大切である。

では、保育者として、どのようなことに気をつけて歌うことができれば良いのかを記述してみる。

- ・口を大きく開けて歌う。
- ・唇を大きく動かして歌う。
- ・音程を正しくとって歌う。
- ・表情豊かに（できれば笑い顔で）歌う。
- ・拍の流れやリズムを感じながら、身体全体を使って歌う。
- ・メロディーを感じながら、表情や身体を十分に

生かして歌う。

- ・歌詞の内容を理解したり、情景を想像したりしながら歌う。

学生の実態を考えたとき、これらのことができるようになるのは大変なことではあるが、保育者をめざす学生にはぜひ指導し歌唱力をつけていきたい。

### （５）「弾き歌い」指導のステップについて

一言で「弾き歌い」と言うが、そこにはいくつかの要素がある。楽譜を読み取ること。楽譜の音符がピアノのどこの位置になるのかを確認すること。ピアノで右手と左手の音を弾くこと。歌詞の内容や情景を読み取ること。歌を歌うということ。これらのことを同時に進行させていくことによって、始めて「弾き歌い」は成立する。しかも、これらのことが同時に何とかできるという程度ではなく、保育現場では子どもたちの歌やしぐさなどの様子を見たり、支援したりしながら弾き歌いをすることが必要になってくる。

このように保育者としてのピアノ弾き歌いの技量を高めていくことは大切なことではあるが、学生にとって非常に困難を伴う。そのため筆者は、弾き歌いができるようになるためには、学生がどのように学習していくとよいのかを、音楽の様々な要素と関連させて下記のような学習ステップを考えて実践した。

表 8 【弾き歌い指導のステップ】

- |   |
|---|
| ①楽譜から音楽情報を読み取る。<br>調、拍子、速度、メロディー、リズムなど                |
| ②高音部譜表（おおよそ音記号）の楽譜を読み取る。                              |
| ③高音部譜表の楽譜に書かれている音符や休符などの音楽情報を、鍵盤の位置を確認しながら、右手でピアノを弾く。 |
| ④低音部譜表（おおよそ音記号）の楽譜を読み取る。                              |
| ⑤低音部譜表の楽譜に書かれている音符や休符などの音楽情報を、鍵盤の位置を確認しながら、左手でピアノを弾く。 |
| ⑥歌詞を読み取り、その歌詞の内容やイメージをふくらませ歌詞を覚える。                    |

- ⑦高音部譜表を右手でピアノで弾きながら歌を口ずさみ、歌のおおまかなイメージを掴む。慣れてきたら徐々に大きな声で歌う。
- ⑧高音部譜表と低音部譜表の楽譜を見ながら、右手と左手を合わせ両手でピアノを弾く。
- ⑨両手でピアノ伴奏をしながら歌を歌い、「弾き歌い」をする。
- ⑩保育現場で自分の目の前に子どもたちがいることをイメージして、子どもたちの様子を見たり支援をしたりしながら「弾き歌い」をする。

学生にとって一番困難なところは「ステップ⑨」である。ここでは、高音部譜表を右手でピアノを弾く。低音部譜表を左手でピアノを弾く。歌を歌う。という3つのことを、しかも、楽譜と歌詞を同時に見ながら「弾き歌い」しなければならない。ステップ⑨でつまづいている学生には、ピアノを両手で伴奏する。(「ステップ⑧」)あるいは、高音部譜表を右手でピアノを弾きながら歌を歌う。(「ステップ⑦」)を繰り返し練習させ、何とかピアノが弾くことができるたか、何とか歌を歌うことができるというようなレベルではなく、ピアノも歌も自信をもって演奏できるようになってから、再度ステップ⑨の学習に取り組ませたい。

また、ステップ⑩については、学生一人一人の実態にもよるが、かなりの練習量を確保しないと到達することは難しい状況にある。学生を認め励ましながらか少しでも教育現場で生きて働くような「弾き歌い」の力を高めていきたいと思う。

## 5 ま と め

ピアノの「弾き歌い」は、保育現場では必要不可欠である。このことは、今回の学生に対する実態調査・意識調査においても、多くの学生が「保育者にとって弾き歌いの技術は必要である。」ことを認識している。

今回の実践研究では、「弾き歌い」をするためには、読譜力を高める指導、ピアノ実技の力を高める指導、歌唱力を高める指導について、学生の実態を踏まえながらそれぞれに明確な観点をもって、具体的に指導していくことの大切さを明らかにした。

さらに、読譜力、ピアノ実技の力、歌唱力の3つの力を、具体的な学習ステップを踏んで(「弾き歌い指導のステップ」)段階的に指導していくことの大切さを明らかにした。

本学で「弾き歌い」を学んだ学生が、教育現場で子どもたちとともに楽しく保育に関わってくれることを期待するとともに、筆者は、今後も学生の意見・意識を取り入れながら実践研究をし、検証を累積していきたい。

## 引用文献

- (1) 文部科学省「小学校学習指導要領 音楽編」(平成20年3月)
- (2) 厚生労働省「保育所保育指針」(平成20年3月)
- (3) 文部科学省「幼稚園教育要領」(平成20年3月)